

もうひとつの長征

——大後方への旅（七）

楠原俊代

二二

二月中旬すぎには、臨大の教職員・学生が陸路と海路に分かれて雲南にむけて出発していった。ここで、「大事記」の記録を整理して、人の移動と雲南での受け入れ準備とにわけて述べることにする。

まず、人の移動のための措置としては、二月一四日、臨大第五四回常務委員会で以下のことが決まっている。

——樊際昌、黄梅美德、鐘書箴が、雲南にむかう女子学生の指導にあたるとともに、教職員とその家族の雲南行きについても世話をする。

湘黔滇旅行団指導委員会を成立させる。委員は黄鈺生（字は子堅）、李繼侗、曾昭掄、袁復礼、委員会主席は黄鈺生。湘黔滇旅行団団長には黄師岳を招聘する。

このことから、海路をとった学生も二月一四日以降に出発していったものと考えられるが、かれらのことについては後述する。

「大事記」では、これまで陸路で雲南にむかう臨大学生たちの組織を「徒步旅行団」もしくは「旅行団」と記していたのが、この部分で初めて「湘黔滇旅行団」の名称を用いている。正式名称は「湘黔滇旅行団」であり、この団の命名については次のような話も伝えられている——「湘黔滇旅行団」が成立したとき、多くの人々は「歩行団」と称するように建議した。しかし学校側は、後方では交通手段が極度にとぼしいとはいえ、船や車が利用できるばあいにはできる限り歩行を避ける予定であったこと⁽³⁾から、「旅行団」の方が実状にあっているとみなした。たとえば出発地点の長沙から益陽までの間も船に乗ったのであって、歩いてはいないのである。

また、湘黔滇旅行団の指導委員会主席が黄子堅、旅行団団長が黄師岳というのは、旅行団の学校側の総責任者が黄子堅で、実際の引率者が黄師岳であったということである。黄師岳について、呉徵鎰は、湖南省政府主席張治中がとくに団長として黄師岳中將を派遣したのだ、と記している⁽⁴⁾。このことについては、雲鎮が、とうじ湘西には「土匪」がいたため、学校はとくに黄師岳將軍を旅行団引率者として招聘したのだという⁽⁵⁾。馮鐘豫は、次のようにも記している⁽⁶⁾——とうじ湖南・貴州の省境は、なおも「緑林の豪傑」（盗賊のこと）に占拠されており、陸路のばあいはここを通っていかざるをえず、旅行団にとってたいへんな脅威となっていた。このため一〇日ほどというものは毎日、学生

一人が黄將軍の名刺を持って、地方の役所が派遣してくれた付き添いとともに先に出発し、かれらの哨兵屯所に挨拶したうえで、その後から旅行団は進んでいった。

『雲南師範大学大事記』には、二月一四日の常務委員会で、教職員による寄付金のなかから一、六〇〇元を出して、雲南に赴く困窮学生の旅費の補助とすることも決まったという。この寄付金がどのようなかたちで運用されたのか、その詳細については不明であるが、これより先の二月一日には、窮乏学生援助委員会（原文は、「捐助寒苦学生委員会」）が設立されていた。この委員会は教職員に支給される雲南行きの旅費を寄付して窮乏学生を援助しようとするもので、責任者は曾昭掄であった——旅費を困窮学生に寄付する話は、一月末には出ており、葉公超が呼びかけ、多くのものがこれに応じたとの記録もある。⁷⁾

呉徵鎰は、さらにつづけてこの旅行団は軍事管理をもちい二大隊三中隊に分けられ、指導総責任者の黄子堅と団長の黄師岳を助けて毛鴻等三名の教官が中隊長となり、小隊長にはおおむね学生があたる。団本部は学生一小隊、事務員一名、医官三名からなる。同行の教師、総勢一名が輔導団を組織した、と記している。⁸⁾

ところが、『南開大学校史』では、陸路で歩いていった教師学生は三三六六人。そのうち教師は十一人。この他に、黄師岳、毛鴻等三名の軍事訓練教官、三名の医者と事務員数名も同行する。歩行団では厳格な軍事管理がおこなわれ、二つの大隊に分けられた。大隊長には軍事訓練の教官があたり、その下に若干の中隊と分隊がおかれた。中隊長および分隊長には学生があたり、一分隊は十数人。随行する飲食班が全団員の食事の面倒をみ、この他に二台の自動車が荷物を運搬した、と記している。⁹⁾

毛鴻等の軍事訓練教官は、いったい大隊長だったのか、中隊長だったのか。先にも見たように、旅行団の構成員が

何人であったのかはもとより、旅行団の組織、旅行団の長沙出発の日¹⁰にいたるまで、のこされた記録はいろいろに食い違いを見せている。

かれらの雲南行きについては、団員の多くが日記を書いたが、旅行団本部でも責任者において日記を作成し、これを香港に送付して印刷発行に備えていた。ところが、それが戦乱のなかで焼失してしまったのである。日本軍が、香港全島を占領したのは一九四一年一月二五日のことで、その前後にでも焼失してしまったのであろうか。このために、湘黔滇旅行団についての資料は、銭能欣の『西南三千五百里』（商務印書館、一九三九年六月初版、四一年一月再版）と呉徵鎰の「長征日記——由長沙到昆明」の他には、若干の短い回想録があるばかりで、しかも呉徵鎰の「長征日記」は印刷が不鮮明で判読できない箇所も多くある。それらの日記もしくは回想録のどれに依ったかによって、各大学の『校史』や『大事記』に異同が生じているのであろう。しかし本稿においては、こうした食い違いをそのまま併記するとともに、できるかぎり正確にかれらの「長征」のあとをたどっていききたい。

二三

湘黔滇旅行旅行団に同行した教授は、次の五名である。

黄子堅（一八九八）

中)、湖北省沔陽の人、南開中学、清華学校出身、一九一九年から二五年まで米留

学。シカゴ大学教育学修士。南開大学教育学・心理学教授兼秘書長。

李繼侗（一八九七～一九六一中）、江蘇省興化の人、南京の金陵大学卒業後、清華学校の公費生として一九二二年から二五年まで米留学。エール大学理学博士（森林学）。清華大学生物学系教授。

曾昭掄（一八九九～一九六七中）、湖南省湘郷の人、清華学校出身、一九二〇年から二六年まで米留学。マサチューセッツ工科大学理学博士。北京大学化学系教授。

袁復礼（一八九三～一九八七中）、河北省徐水の人、清華学校出身、一九一五年から二二年まで米留学。コロンビア大学理学修士（地質学）。清華大学地学系主任。

聞一多（一八九九～一九四六中）、湖北省浠水の人、清華学校出身、一九二三年から二五年まで米留学。清華大学中国文学系教授。

この他に、次の六名の若手教師も同行した¹¹⁾（括弧内は、専門分野と清華大学の卒業年度）。

李嘉言（中国文学、一九三四年）

王鍾山（地質学、一九三六年）

郭海峯（昆虫学、一九三六年）

呉徵鎰（生物学、一九三七年）

許維遼（中国文学）

毛応闓（昆虫学）

五人の教授はいずれも清華学校出身者もしくは清華学校の公費生としてアメリカへ留学しており、蔡孝敏によれば、清華大学生物系助教の毛応闓以外はすべて清華学校・清華大学の校友であったという¹²⁾。最終的には以上の二一名の

教師が輔導団を組織して、昆明まで陸路でむかった。

しかし、この一名も簡単に決まったわけではなかった。

たとえば、一九三六年に清華大学地学系を卒業した孟昭彝は、袁復礼教授から助教として一緒に昆明へむかうようにとの話があったが、かれは学校の雲南移転に反対で、強情を張って長沙にのこったのだ、と記している。¹⁹⁾

聞一多の二月十六日付父宛手紙には、教授五名、助教五名が旅行団に参加とあり、出発の日までにさらに一名増えたのかもしれない。そして、この聞一多自身もまた出発まぎわになってから、旅行団参加を決めたのであった。一月二十九日夜、郷里から長沙にもどった聞一多は、三〇日付妻宛の手紙に香港経由の海路で行くと書いていた。それが、短期間のうちに、次のようにかわっている。

二月一日付二哥（従兄）宛：歩いて雲南にむかう教職員は五、六人。自分も参加する予定。よい経験にもなり、節約もできる。出発の時期は未定。だいたい一週間後になるもよう。

二月一日付両親宛：海路は、広州でしゅっちゅう空襲があり、あまり安全ではない。陸路の旅行団には参加しなかったのだが、身体に自信がない。そこで桂林経由で雲南へいく第三のコースをとることにした。このコースは費用がやや多くかかるが、学校から支給される旅費六五元があるから、自己負担は多くとも四、五〇元ですむ。これを機に広西の山水に遊ぶのもわるくはない。（第二のコースの）出発の時期は、だいたい二月一五、六日になりそうだ。

二月一六日付父宛：自動車で桂林経由で雲南へ行くのは費用がかかりすぎるため、やはり学生とともに歩いて

行くことにした。出発は一九日と決まる。

聞一多は、以上の手紙と湘黔滇旅行団指導委員会の委員にもなっていないことから、この委員会の成立した二月一四日にはまだ旅行団に同行することを決めていなかったことが推測される。¹⁴ 輔導団の五名の教授のなかで聞一多は最年少であり、ほんらい陸路の旅行団参加を希望してはいたのだが、身体に自信がないということではなかなか決心がつかなかったのである。

たとえば、最年長の、といっても聞一多より六歳年長であるにすぎないのだが、袁復礼は長沙臨大に移ってから湘西へ鉱物資源の調査に赴いている——このときは、先にあげた孟昭彝も袁復礼に同行しており、調査からもどると臨大の雲南移転の準備がすすめられていたという。¹⁵ また、李繼侗も一九三七年の秋に、貴陽まで四週間の林業調査に赴いている。¹⁶ 旅行団の行程の途中までとはいえず、これまでに調査に赴いたこともある二名の教授は、行く先々の土地の状況にあかろく、専攻のうえでも学生を指導するのにふさわしいということで、旅行団に同行することになったものであろう。ところが、聞一多のばあいは、「(聞)一多が旅行団に参加するなら、棺桶もいっしょに運んでいかなければ」と楊振声がいったというような話も伝えられており、昆明まで無事に到着した聞一多が、楊振声に出会おうと「今回、ほんとうに棺桶を運んできていけば、君にあげられたんだが」といって、一人で大笑いをするような一コマもあったほど、体力の面で危ぶまれたのであった。¹⁷

先に引いた聞一多の二月十六日付手紙には、教授五名、助教五名の他に、医者と看護人各一名がつきそい、ラジオ一台、図書若干箱をもち、炊事夫十余名も加わるといふ。そしてさらに、あれほど強く移転に反対していた張治中

主席から水筒、携帯食糧、草鞋^{わらじ}、ゲートル等の行軍用具数百名分と豚五匹が、教育庁長朱経農からは豚二匹が送られた、とも記している。豚料理で旅行団一行のための盛大な壮行会が開かれたのであろう。かくしてようやく湘黔滇旅行団の出発は二月一九日と決まったのである。

二四

雲南での受け入れ準備については、以下のような記録がのこされている。

『雲南師範大学大事記』二月九日と一〇日の間に、同月、南開大学化学教授楊石先、北京大学経済学教授秦瓚、清華大学建築学教授王明之がそれぞれ三大学ならびに文・理・工の三科^マを代表して大学開設の準備のため雲南へむけて先に出発する。かれらはジープに乗って、物資を積載した二台のトラックとともに一週間後に昆明に到着した——一本に、貴州經由で十数日、かかって昆明に到着したという¹⁸。また、二月一五日には、蔣夢麟常務委員が大学の雲南移転をとりしきるために飛行機で昆明へ飛んだ、と記す。

張起鈞によれば¹⁹、秦瓚教授²⁰の父、秦樹声は清末有数の学者で、雲南で長年にわたって官途につき、学台を務めていた。「学台」とは、清代の学政の俗称で、学政とは提督学政の簡稱、朝廷から派遣され一省の学務を掌る官で、科挙の院試を主催する。任期は三年。このため、雲南で声望のたかい文人学者はことごとく秦樹声の門人で、とうじの雲南省教育庁長龔自知等も秦瓚の兄弟弟子にあたった。そこで臨大移転にさいし先遣隊として雲南におもむき、大学

開設の準備にとめた。ただし、雲南行きの経路については、秦瓚は雲南へ行ったことはあっても幼いころのことで覚えておらず、かりに覚えていたとしても何十年も昔のことである現在の状況とは合致しないため、学校は雷澍滋教官に助言を求めた。⁽²¹⁾ 張起鈞は、大学の雲南移転にさいし特別な役割をはたしたのが、この秦瓚と雷澍滋だったという。

また、移転が決まると、学校は広州・香港・海防・河口に教授、助教を派遣して常駐させ、海路をとった学生たちの面倒をみた。「大事記」にも、二月一日広州・香港に、一日海防・河口に招待処を設置。各招待処の責任者は、鄭華熾（広州）、葉公超、陳福田（香港）、徐錫良（海防）、雷樹滋（河口）。三月五日、この四招待処を同時に閉鎖、と記す。聞一多の一月三〇日付妻宛手紙には、「（学校は）香港には葉公超、海防には陳福田を派遣、陳はもう出発、公超も二月三日に出発」とあり、招待処開設のために責任者たちは随分早く長沙を発つたことが知られる。しかし、招待処の閉鎖は三月五日ではなく、もっと後になったのではないかと考えられる。というのは、雲南省での移転先がなかなか決まらず、広州に到着していた学生たちにそのまま約一カ月あるいはそれ以上も滞在させ、⁽²²⁾ 香港にはむかわせなかったからである。

ちょうどそのころ香港は九龍にあった浦薛鳳は、香港招待処の責任者、葉公超のところで二月末か三月初め、昆明に落ち着き先がなく、同じ雲南省の蒙自に臨大は移転するとの蔣夢麟からの電報を見ていたのだが、そのご理・工は蒙自に、文・法は昆明に設置されるという話を聞く。ところがそれから間もなくまた電報があり、今度は理・工は昆明、文・法は蒙自と決まったという。⁽²³⁾ 最終的にはそうだったのであり、この年の七月に次の学期が終了し、文・法学院も昆明に移転するまでのあいだ、すなわち次の一学期間のみ理・工学院は昆明に、文・法学院は蒙自に設置されたのであったが、なかなか校舎の手配がつかず、結論がでなかったのである。

鄭天挺は、三月初め、校舎が足りないということで、蔣夢麟北京大学校長が蒙自に視察に赴き、一四日昆明にもどる。その翌日の一五日午後会議が開かれ——出席者は蔣夢麟、張伯苓、周炳琳、施嘉煬、吳有訓、秦瓚と鄭天挺、文・法学院は蒙自に、理・工学院は昆明に設置、北京・清華・南開の三大学から各一名ずつ蒙自に派遣し、分校開設の準備にあたることが決まった。清華大学は王明之、南開大学は楊石先、北京大学は鄭天挺を派遣することになり、鄭天挺は三月一七日蒙自に到着した、と記している。⁽²⁴⁾ かれの記述から、大学の移転先が最終的に決まったのは三月一五日の午後であったことが知られる。なお鄭天挺のばあい、二月一五日期、同僚十数人とともに長沙を自動車で出発し（第三のコース）、半月かかって三月一日午後五時半昆明に到着している。⁽²⁵⁾

ここで、浦薛鳳によって、海路をとった学生たちの状況を見ておこう。⁽²⁶⁾

長沙から広州に到着した学生たちは、臨大招待処の設置された嶺南大学に宿泊した。⁽²⁷⁾ とうじ、授業にでていた嶺南大学学生はわずかに三百余人であるのにたいし、宿泊させてもらった臨大生は四、五百人にもなった。もともと香港に出るまで一、二泊するだけの予定であったのが、昆明での落ち着き先が決まらず、しばらく出発しないようにとの電報があり、やむをえず長期にわたって宿泊することになり、数のうえでは主客転倒となってしまった。

三月初旬になって、初めて学生たちの第一団が広州から香港に到着し、基督教青年会（YMCAとYWCA）⁽²⁸⁾ に泊まった。香港から海防までの汽船の三等切符は陳福田、葉公超両教授があらかじめ注文。香港・海防間は汽船の運行回数が多くないうえ、船も小さくて一度に数十人しか乗船できなかった。海防では、清華大学の徐錫良（外国語文学系、一九四二年から教員）が交渉した結果、運賃はフランス汽船については臨大の教師学生とも二割引、滇越路については学生のみ割引料金となった。海防では華僑が喜んで援助の手を差しのべてくれ、また汽船が着くたびに

総領事が埠頭まで出向いて通関手続き等について面倒をみてくれた。中越国境の中国側の河口駅では（仏領印度支那今のベトナム側は老街駅^{ラオカイ}）、臨大から派遣された雲南出身の雷教官が面倒を見た。

香港・海防はなんといっても国外であり、とくに宿舎や船の切符の手配、通関手続き等については、たしかに学校が面倒をみる必要があった。浦薛鳳は、香港に駐在していた清華大学の陳福田と北京大学の葉公超がもつとも忙しく、たいそう世話になった。そして、このたびの臨大雲南移転は組織的に秩序だっておこなわれ、すべてにわたって滞りはなかったといえる、と記している。

浦薛鳳のばあいは、四月一五日午後三時発の船で、おそらくは一番最後に雲南にむかった学生たちとともに香港を出発、一九日早朝に海防に到着。この船には臨大学生一七八人および教師あわせて二百名ほどが乗船した。一行の荷物だけでも七、八百個あり、早朝に到着したにもかかわらず、通関のための荷物検査がおこなわれたのは午後二時半。二一日、学生百七、八十人は四等列車を借りきって海防を出発。浦薛鳳は混雑を避けて、同僚および土木系教授蔡方蔭とその学生等二四人で二二日朝五時半に出発。老街駅には夜七時半到着。老街に泊まって、翌二三日午後四時四五分碧色寨に到着、列車を乗りかえ夕闇せまるころ蒙自に到着——蒙自に到着してから、かれは常熟城にもどった父が長沙に出していた二月一六日付手紙と三番目の姉からの手紙を受け取り、郷里の家が焼け落ち、無一物になってしまったことを知った。

以上の回想録から、四月中旬すぎにもまだ大勢の学生たちが海防、河口を経由して雲南にむかっており、浦薛鳳も四月二二日老街駅で雷教官の出迎えをうけていることが知られ、「大事記」記載のとおり、三月五日、四カ所の招待処が同時に閉鎖されたとは考えられない。また、張起鈞も河口招待処の雷教官のもとで助手として二カ月間働いた、

と記している。²⁹⁾

二五

ここで、海路で雲南にむかった学生たちの回想録を要約抜粋しておこう。かれらの記述には相違する部分もある。いずれも、三〇年から五〇年以上も後になって書かれたものであり、記憶に間違いもあるだろう。しかし、戦火のなかにを短期間のうちに八〇〇人もが移動したのであって、かれらが同じ体験をしたはずもなく、ここでは、そのままあげることにする（傍点は引用者）。

郁振鏞「三〇年後憶長沙——長沙臨時大学一段古」⁽³⁰⁾

(郁振鏞は清華大学経済系一九三九年卒業、ニューヨーク在住)

長沙を発った夜も雨が降っていた。手足を失い、前線から憔悴しきって撤退してきた傷兵たちが、駅の構内のぬかるんだ地面いっぱい横たわっていた。戦況が緊迫していたため、かれらは適切な傷の手当ても受けられず、お湯の一口さえ飲ませてはもらえなかった。これは魔法瓶をもっていた学生が飲ませてやったのだが、寒風吹きすさぶ冷たい雨のなかで、状況は悲惨きわまりないものであった。しかし、このとき学生たちのだれもが、このたびの雲南行きは戦禍からの逃避ではなく、みずからをいっそう充実させ、強健なものへと変革し、祖国の

恩に報いて力を尽くすのだ、との強い決意を胸にいだいていた。

何兆男「男生的禁地」⁽³¹⁾（何兆男は清華大学経済系一九三八年卒業、シアトル在住、女性）

湘黔滇旅行団を組織した男子学生は二〇〇余人。海路をとった学生は二回にわかれて長沙を出発。何兆男は、二回目に出発。粵漢鐵路で南下するさい、学校は学生たちのために列車を何両か借り切ってくれた。三等列車で木製の硬い腰掛けではあったが、全員が座れた。日本軍占領地区から避難してきたときに、傷兵や難民が窓のない有蓋貨車にすし詰めになって足の踏み場もなかったのと比べれば極楽だった。

広州に到着すると、嶺南大学の女子学生宿舎に泊まった。六人一部屋で、各人小さな鉄製のベッド一つ。広州では毎日、街をぶらつき、南国の風光と広東の飲茶ヤムチャを満喫することができた。ある晩、聯大の学生が嶺南大学の講堂でにわかに盛大な「惜別晚会」を開いたこともあった。演目は多彩でどれも素晴らしかったが、最後の二グループの演じた京劇(32)がもっとも喝采を博し、聯大の学生たちの多芸多才ぶりに感服してしまった。広州からは広九路（広州・九龍間の鉄道）で香港にむかった。

雲鎮「津湘滇求学記」⁽³³⁾（雲鎮は南開大学電機系一九三九年卒業、カリフォルニア在住）

昆明で校舎の手配がつかないため、広州の嶺南大学附中宿舎にしばらく滞在。この機会に広州の各所を参観した。嶺南大学の教師学生からは大切にされ、歓迎会では、全員が厳かに起立し、嶺南大学の学生の喇叭にあわせて抗日戦争中に流行っていた「起来！（起ち上がろう）」の歌をうたったのを覚えている（「起来！」の歌とは、

田漢作詞・聶耳作曲の「義勇軍進行曲」のこと。一九三五年の映画「風雲児女」の主題歌で、抗日戦争中、広くうたわれた⁽³⁴⁾。みなは歌いながら目に涙をあふれさせ、「風は蕭蕭として易水寒し、壮士一たび去って復た還らず（風蕭蕭兮易水寒、壮士一去兮不復還。『史記』刺客列伝に見える）」の悲壮な雰囲気につつまれ、熱血たぎる学生たちは、抗戦のために奮闘しようという雄壮なる志をさらに堅固なものとした。

広州には一カ月あまり滞在した後、⁽³⁵⁾ようやく香港にむけて出発してよいとの通知がきた。香港ではYMCAに宿泊。香港から海南島経由で海防着。海防では、女子学生がかけている眼鏡を奪われるようなこともあった。

曹美英「播遷中的聯大女同学『想到就写』・『男生的禁地』補遺⁽³⁶⁾」

（曹美英は北京大学一九三八年卒業、連絡先はシアトル、女性）

わたくしたちは広州に一、二カ月滞在、嶺南大学の女子学生宿舎の部屋をいくつか空けてもらって泊まった。広州市街漫遊に出かけない日はほとんどなかった。

香港へは、夕方、嶺南大学から出発した。しかし、日本軍機の空襲を予防し避難するのにも都合がよいということ、しばらく珠江のほとりですべて待っていた。夜のとほりがおきてしまってもまだ少しのあいだ待って、ようやく命令がおけると、ただちに整列して乗船した。香港に到着したときにはもう夜が明けていた。

香港では、銅鑼湾^{トロンローワン}（Causeway Bay）のYWCAにしばらく滞在した。香港出身の友人が家に招いて広東料理をご馳走してくれたり、また、とうじ香港では広東語の話せないものは騙されることもあって、両替で損をしてはいけないと、紙幣の両替や汽船の切符の購入までしてくれた。

萬宝康「我怎樣成為聯大第一屆畢業生」⁽³⁷⁾（萬宝康は西南聯合大学地学系氣象組一九三八年卒業、台北市在住）

本来、青島の山東大学物理系の学生。一九三七年の夏、三年生の課程を終え、南京中央研究院の氣象台と天文台で実習中に戦争が始まり、北平の家にも大学にも帰れなくなって、長沙臨大で委託学生として学ぶ。雲南移転のさいには旅行団参加を認められたが、両親のつよい反対で断念せざるをえず、海路をとる。とうじ海路で雲南にむかう学生はきわめて少数と聞いていた。

嶺南大学では一部の教室に宿泊し、三カ月あまりも広州にとどまった。広州からは広九路で香港にむかう。香港のYMCAに一泊した後、海防へ出発、海防では各所に分散して一泊して滇越路で昆明にむかった。

羅宏孝「畢業五十年」⁽³⁸⁾（羅宏孝は西南聯合大学外国語文系一九四一年卒業、アメリカ在住、女性）

二月長沙出発。三月香港へ。海防ではスリの横行はなはだしく、果物を買いに一緒に街にかけた友人の女子学生が、かけている眼鏡を一三、四歳の子供に奪われるようなこともあった。

海防から昆明までの汽車は「四項」。三等列車のまだ下で、車両のなかは木製の長い腰掛けが二列あり、そのあいだいっぱい学生たちの荷物を積み上げた。

この他には、『南開大学校史』に、「歩行団の学生は大半が被占領地や戦地もしくは内陸部出身の貧しい青年であった。歩行団に参加すると、学校が荷物を運んでくれるばかりか、道中の食費と宿泊費まで出してもらえたのである」

と記す⁽³⁹⁾が、北京大学政治系を一九三八年に卒業した張起鈞のようなケースもあったことをあげておく。

張起鈞は次のように記している——海路については、みなは自費でそれぞれ出発していった。学校は、道中四カ所
に招待処を開設し、数人の教師学生を派遣して面倒をみただけ。とうじ北京大学四年生だったかれは、河口招待処の
責任者、雲南省出身の雷澍滋教官のもとで助手として働いた。かれらには給料も事務費もでなかったが、車馬費のよ
うな手当が学校から支給された。雷教官は一日に五元、張起鈞は二元。張起鈞は貧乏学生で、救済金の支給をうけて
生活しており、学校の移転が決まったときにはわずか一九元しかなく、たくさんあるのは勇気だけだった。ところが
思いもかけず学校がこの仕事を与えてくれ、二カ月間ということで一〇〇元になり、雲南までの旅費ができたばかり
か、そのご学校から毎月七元の学資貸与まで受けることができ、またとうじは物価も安かったため、この一〇〇元は
卒業して就職先が決まるまでかれの生活をささえてくれた。しかも、かれらが河口に滞在していた二カ月のあいだ、
質素な食事代以外に金銭を支払う必要がまるでなく、この一〇〇元はほとんど残ったのであった。⁽⁴¹⁾

張起鈞によれば、とうじは海防から昆明まで滇越路で三日もかかった。いまでは想像もつかないことなのであるが、
夜は列車をおりて旅館に泊まり、翌日また列車にのって進んでゆくのである。まず第一日めに海防で列車にのると、
その日の夕方には老街につき、ここで泊まる。翌朝、橋を歩いてわたって河口から同じ列車にのってゆく。老街と河
口は橋でつながっていて、煩雑な出入国手続きはなされず、人数を調べるだけであった。そして二日めの夕方には開
遠（阿迷州ともいう）に到着、ここでも同じように列車をおりて泊まり、その翌朝ふたたび列車にのって、三日めの
夕方ようやく昆明に到着したのだという。

雷教官と張起鈞の仕事は、臨大の教師学生の出入国手続きの面倒をみることであった。しかし滇越路は一日に一本

しか通っておらず、毎日夕方、列車がつくと老街へ行って臨大の教師学生の有無を調べ、乗っていれば旅館に案内して世話をし、翌朝、出入国手続きの面倒をみるだけで、かれらが列車にのって出発してゆけばそれで終わりで簡単なものであった。なかには河口を気に入って、学校が始まるまでまだ余裕があると、二、三日滞在してゆく張起鈞の友人もあった。

張起鈞は、海路をとった学生たちは自費と記しているが、正確には学生たちに旅費として二〇元が支給された⁽⁴²⁾。それでも海路で昆明にむかったばあい、費用総額は少なくとも六、七〇元、多くて一〇〇元もかかった⁽⁴³⁾ことから、負担は大変なものであった。そのかれらの昆明行きも、海防での通関時に賄賂を要求されたこと、海防に横行するスリ、炎天下に滇越路の木を打ちつけて間に合わせただけの四等列車の窓⁽⁴⁴⁾など、快適には程遠い大旅行であった。しかし、先にあげた回想録からも知られるように、若かったかれらはこれを機に広州に遊び、歓迎会や惜別晩会を開き、よく歌い、よく笑い、よく喋り、首都南京が落ちても、降伏することなど考えもしないで、雲南へと避難していった。大当局も、戦火と激しい移転反対運動のなかで、短期間のうちに大勢の教職員学生の移動と雲南での受け入れ準備をすすめる、浦薛鳳が述べていたように、まことに「このたびの臨大雲南移転は組織的に秩序だっておこなわれ、すべてにわたって滞りはなかった」ということは驚くべきことなのであった。

二六

それでは、長沙臨大が雲南に移転しなければどうなっていたのであろうか。その後の長沙の状況について見ておこ

『湖南近百年大事紀述』⁽⁴⁵⁾によれば、一九三八年四月一〇日、長沙は敵機二七機による四度目の空襲をうけた。このとき、岳麓山の湖南大学他がやられ、学生・労働者・住民等、百人余の死傷者が出た。湖南大学の被害は莫大なもので、図書館は全壊、科学館は三分の二が破壊され、学生宿舍一棟も爆撃をうけたという。

故宮博物院の文物が、戦争中、後方の三カ所に分散して搬出されていたことについては先に述べた（本稿第一章二七頁参照）。そのうちの一部分がこの湖南大学図書館に保管されていたことがある。⁽⁴⁶⁾日中戦争の勃発により、一九三七年八月一四日、南京から搬出されていたのである。その後、湖南大学の背後にある愛晚亭付近に洞穴を掘り、これらの文物を収蔵するという計画もあった。しかし、長沙にも空襲警報が出るようになり、長沙駅付近が爆撃されるにおよび、この計画は実施されることなく、貴州省の貴陽に移すことが決まって、同年一二月に移送が開始された——長沙駅付近が爆撃されたというのは、一月二四日の第一回長沙空襲をさしているであろう。それらの文物はちょうど旧正月の元旦に貴陽に到着。貴陽でも万一のことがあればまだ危険ということで、最終的には一九三八年一月同省の安順にまで運ばれた。

このため故宮の文物は難を免れたのだが、この作業にたずさわった那志良は、『故宮四十年』⁽⁴⁷⁾のなかで、文物を長沙から搬出して間もなく、だいたい一カ月もたたないうちに長沙が爆撃され、湖南大学図書館もやられてしまった。そしてそれから間もなく、長沙がまた空襲をうけ、しかもこのときには愛晚亭付近に避難していた人々が多くて、そこを敵機に低空掃射されたため、大勢の人々がここで死亡した、と記している。湖南大学図書館空襲の時期は、おそらく那志良の記憶間違いだと推測されるが、湖南大や愛晚亭付近がやられたのは事実であろう。愛晚亭のあった

この岳麓山には、臨大の浦薛鳳や雲鎮も空襲からの避難を兼ねてよく出かけていたのである。⁴⁸ 臨大移転がもう少し遅れていれば、臨大関係者にも大きな被害が出ていたところであった。

『湖南近百年大事紀述』によれば、さらに一九三八年の八月一七日には敵機一八機による七度目の長沙空襲がおこなわれ、二〇余カ所に一二〇個あまりの爆弾が投下され、民家および商店三〇〇余棟が破壊され、一般庶民の死傷者は八〇〇余人にものぼり、空前の被害をうけた。そのご空襲はますますはなはだしくなると、日本軍の岳陽侵攻のさいには数次におよぶ大規模な長沙爆撃がくりかえされた。たとえば一〇月一九日には敵機四四機が三度にわたって空襲し、⁴⁹ 二四日には三五機が四個編隊に分かれて空襲をくわえ、はかり知れないほどの損失を与えた。そして、翌一月一三日のいわゆる「長沙の大火」によって、城内の十分の九が焼け落ちてしまったのである（本稿一九〇二二頁参照）。

これより先、戦線は拡大の一途をたどり、大本営は一九三八年六月一五日の御前会議で漢口攻略作戦実施を決定し、八月二二日に漢口攻略を発令。九月七日の御前会議では広東攻略作戦実施を決定、九月一九日広東攻略の大令発令。国民政府もこれを予期し、六月九日には武漢駐在の党政軍の諸機関が撤退を開始し、党政の機関は重慶に、軍事機関は湖南に移っていた。日本軍は一〇月二一日には広東を占領し、同月二六日漢口・武昌を占領、翌二七日には漢陽を占領して粵漢線を遮断し、武漢は陥落した。⁵⁰

しかし、その後も日本軍はさらに南下して湘北（湖南省北部）にむけて侵攻をつづけ、十一月一日には岳陽まで占領された。長沙の大火は、まさにこの岳陽陥落のために生じたのであった。

『中国抗戦画史』には、以下のように記している——岳陽陥落の日、情報の不正確および前線と後方との連絡不十

分のため、一二日晩の長沙の大火が発生した。大火は一二日の真夜中、数十カ所から同時に起こり、一四日になってようやく鎮火した。長沙城内の八角亭、中正路（今の解放路）、南正路一帯の市街地および官公署、対岸の岳麓山ふもとの湖南大学と第一紡紗廠はすべて灰燼に帰した。

また『湖南近百年大事紀述』には、次のように記されている。⁽⁵²⁾

——岳陽陥落の知らせは、省都長沙に大きな衝撃を与えた。そこで湖南省政府当局は逃亡の前に、「堅壁清野」と「焦土政策」の実施を口実に、軍警に命じて長沙に火を放った——「堅壁清野」とは、陣地を死守して敵の進攻を阻み、撤退のさいには一切の物資を埋蔵または焼却して、敵に利用させないようにする戦術、「焦土政策」とは、退却のさい、建物・物資などをことごとく破壊または焼却して敵に利用させないようにする政策。

一月一二日深夜（実際には一三日午前）一時ごろ、城内の住民がちょうど深い眠りについていたころ、長沙警備司令酆悌、警備第二团团長徐琨、公安局局長文重孚らが、大量の軍警を長沙市の各所に派遣、軍警らは三々五々群れをなして、商店と住宅の区別もなく一律に火を放ち、たちまちのうちに長沙城内は火の海となった。

この大火で焼失した家屋五万余棟、家を失った住民二、三十万、焼死した市民は二万余人にも達した。

この長沙の大火の経緯については、責任の所在を蒋介石、張治中、酆悌ら警備当局のいずれにおくかによって諸本にかなり異同がある。⁽⁵³⁾だが、最終的には、以下のような処置が下された。⁽⁵⁴⁾

一月一八日 蒋介石は世論に迫られて、長沙警備司令酆悌、警備第二团团長徐琨、警察局局长文重孚の逮捕

命令をだし、二〇日銃殺刑に処した。

一月二三日 国民政府は省政府主席張治中には免職にしたうえで現職にとどめ、後日の功勞を見てふたたび現官の待遇を与えるという「革職留任」のかたちで責任をとらせた。そしてその翌日の二四日には、張治中は長沙市火災善後建設委員会を設立し、みずから主任委員を兼任した。

張治中はその後、一九三九年二月軍事委員会委員長（蒋介石）侍従室第一処主任、一九四〇年九月軍事委員会政治部部长兼三青团（三民主義青年団）幹事会書記。一九四六年三月西北行營主任兼新疆省主席、一九四九年四月一日国民党側の和平交渉首席代表として北平に赴くが、共産党の「国内和平協定（最後修正案）」を南京政府が拒否した後、北平にとどまる。同年九月、中国人民政治協商会議に出席、中華人民共和国成立後は中央人民政府委員、西北軍政委員会副主席、国防委員会副主席、全国人民代表大會常務委員会副委員長等を歴任し、一九六九年四月六日北京で病死している。⁵⁵

しかし、湖南の人々は省主席の張治中が罪を警備司令鄧悌等三人になすりつけ、みずからは軍事委員会委員長侍従室主任として転任していったことに憤り、かれの名をはめこんだ対聯「張惶れて措を失す」を作って張治中を嘲弄したというような話も伝えられている。⁵⁶

張・治湘無方向大方案一把火
 湘を治めて方無く 兩大の方案 一把の火
 失 惶

措 中心安忍三顆人頭万古冤

中心安くんぞ忍びん 三顆の人頭 万古の冤

「張惶れて措を失す」には、もちろん「張治中が慌てふためいてどうしてよいか分からない」という意味が掛けられてある。対聯の大意は、張治中は湖南を治めてもまともな政治はおこなわず、大きなことをしでかしたと思えば、それは火つけ。三人の永久に晴らされることのないぬれぎぬに、どうして堪えられようか。堪えることはできない、というものである。⁽⁵⁷⁾

いずれにしても、長沙臨大授業開始から約一年後、臨大の雲南移転からわずか八カ月余で、長沙の街は度重なる日本軍の空襲のうえに大火で大きな被害をこうむったのであった。なお湖南大学は、一九三八年一月武漢の陥落後に、湖南省西部の辰溪へと移転している。

二七

『湖南近百年大事紀述』には、不完全な統計との但し書きをしたうえで、八年間の抗日戦争中における日本軍機の長沙爆撃は百余回を下ることはなかった。その他には、岳陽市、株洲市、衡陽市もくりかえし爆撃をうけた。湖南省にはあわせて七五の県と市があったが、八年間の抗日戦争中に、日本軍機による爆撃をうけなかったのはわずかに二〇余県にすぎなかった、と記している。⁽⁵⁸⁾

湖南省のなかでも長沙は、後述の四次の会戦の主戦場となり、日中戦争期における最激戦の地のひとつとなった。これも日中の諸本により記述に異同があるのだが、たとえば『中国抗日戦争図誌』には、次のように記している。⁵⁹⁾

第一次長沙会戦（一九三九年九月一四日～一〇月七日）

日本軍の死傷者二万余人。

第二次長沙会戦（一九四一年九月七日～一〇月八日）

日本軍、一度は長沙を占領。日本軍の死傷者二万余人、その内、長沙付近の遺棄死体だけでも一万余。

第三次長沙会戦（一九四一年一月一八日～一九四二年一月一六日）

日本軍の死傷者約五万人。

長衡会戦（一九四四年五月二七日～八月八日）

六月一八日長沙陥落、八月八日衡陽陥落。

日本軍の死傷者は六万六千余人、中国軍の死傷者は九万余人。

この長沙会戦は、中国では贛湘会戦、湘北大戦と称されることもある。一方、日本では、中国側の第一次長沙会戦は贛湘作戦（海軍は「湘江作戦」と呼称）、第二次長沙会戦は第一次長沙作戦、第三次長沙会戦は第二次長沙作戦と称す。

日本側資料としては、『戦史叢書 陸海軍年表』に次のように記している。⁶⁰⁾

一九三九年

九月一四日、第一一軍、贛湘作戦（中国軍第九戦区主力撃滅）開始（一〇月中旬終了）。

一九四一年

九月七日、第二軍、大雲山掃討作戦を開始（長沙作戦準備。重慶軍の反撃を受け不期遭遇戦展開（一七日））。

九月一八日、第二軍、長沙（湖南省）作戦を開始（二七日長沙突入。一〇月六日ころ原態勢復帰）。

第一飛行団、第二軍の長沙作戦に協力（一〇月六日）。

一〇月一日、第二軍、長沙方面から反転開始（中旬、原態勢に復帰）。

一二月二四日、第二軍、第二次長沙作戦開始（長沙城外で強大な中国軍の包囲攻撃を受け苦戦、一九四二年一月一五日撤収）。

一九四二年

一月一日、第二軍、長沙攻撃で中国軍の反攻により苦戦（四日反転開始、一月中旬原駐地へ撤収）。

一九四四年

五月二七日、第二軍、湘桂作戦攻勢開始。第五航空軍、第二軍の長沙会戦に協力（六月一八日）。

六月一八日、第二軍（第五八師団）、長沙を攻略。

六月一九日、第五航空軍、衡陽攻略作戦協力開始（八月八日）。

八月八日、第二軍、衡陽を完全占領。

また、『戦史叢書 香港・長沙作戦』所収の「（第一次）長沙作戦総合戦果一覧表」（昭和十六年十一月十五日）に

は、交戦敵延兵力約五〇万人のうち、「敵に与へたる損害」は、遺棄死体五万四千人、俘虜四、三〇〇人、「我が損害」

は、戦死一、六七〇人、戦傷五、一八四人。「第二次長沙作戦総合戦果一覧表」（昭和十七年二月十日）には、交戦敵延兵力二四三、五〇〇人のうち、「敵に与へたる損害」は、遺棄死体二一八、六二二人、俘虜一、〇六五人、「我が損害」は、戦死一、五九一人、戦傷四、四二二人と記されている。⁶¹ここでいう第一次・第二次長沙作戦とは、中国側の第二次・第三次長沙会戦のことである。

この「敵に与へたる損害」については、第一次長沙作戦に参加していた佐々木春隆⁶²が「遺体をいちいち勘定する余裕はないから、わが戦死数を何倍かして報告するのが例である。だから敵を撃破した実感を覚えたのは蒲塘付近だけで、他は犠牲は払ったが蒋政権に打撃を与えた感じはしなかった」、そして、佐々木がもつとも印象深く記憶しているのは、「わが占領地は廃墟が多いのに、重慶政府の支配地は裕福であり、住民は一人残らず避難していたのが抗戦意欲の現れと感ぜられ、まさしく日本は泥沼にはまりこんでいると感じたことであった」と記している。

第二次長沙作戦にも従軍していた佐々木は、弾丸もあまり残ってはおらず、携行食糧もなくなり、飢えと寒さのなかを行軍して、一九四二年の正月を迎えた。一月一日朝の式のあとの会食で、誰も飯盒に入っていたのは、小さい芋二つであった。第一次の作戦で作戦地が荒れたのと、敵が清野空室の作戦を徹底していたからである。例えば第二次長沙作戦は稀に見る負け戦さであって、先輩、同僚将兵の多くを瞬く間に失った、とも記している。「空室清野」も中国軍が日本軍の侵攻にそなえるためにとった措置で、家のなかを空にし畑のものをきれいになくしてしまうことである。

そして、なかでも一九四四年の湘桂作戦は、三十六万もの将兵をつぎ込んでおこなわれた日本陸軍史上最大の作戦であったが、事前に周到に用意された計画的な作戦ではなかった。いわば思いつきの作戦であって、日本軍は当初か

ら、兵隊たちの食糧の補給を考えていなかった。しかも、湘桂作戦で占領した長沙以南の湖南、広西省では、最初から軍の儲備券（華中の日本軍占領区で通用した銀行券）がまったく通用しなかった。このため、第十一軍、第二十軍管下三〇余万の将兵は、一九四四年五月に攻勢を開始以来、全占領期間を通じて、給金もなく、給与（糧食その他）もない盗賊集団とならざるをえなかったのである。

日本軍は稲の実りかけた田んぼを行軍で踏み荒したうえ、まるでハゲタカのごとく米、芋、クリークの魚、食べられるものは何でも漁り、中国の農家を踏み荒らし、田んぼや畑を手当たり次第に掘り返した。衡陽攻略戦後に目の当たりにした中国民間人の惨状について、「日本人に食糧を略奪され、やっと実りかけた田んぼの稲までを食べ尽くされてしまった中国の人たちは飢え、やせ細っていた。骨と皮だけになって死んだ子供たちの亡骸が、数知れず湘江に流された」との回想もある。湘江大橋の上流五百メートルほどのところにあった橋げたに、子どもの死体が何体も何体もひっかかっていた。おだやかに流れる湘江が、ひとたび戦禍に巻き込まれると、人をのむ流れにかわるのだともいう。

この湘桂作戦で、日本軍は戦死、戦病死者十万余を出した——そのなかには、一枚の召集令状で、結婚して一年余の妻をのこし、出征後二〇日目に生まれた長男の顔を見ることもなく、どこへ行くのかも知らされることなく日本を去り、湘桂作戦に参加させられ、この湖南の地に果てた兵士もあった。そして、これに数倍の傷病者をくわえると大変な数になるのだが、それ以上に中国の人々には大きな被害を与えたのであった。⁶³

臨大文学院が設置されていた南岳には、湘桂作戦の第十一軍司令部が置かれた。長沙攻略後数日たった六月下旬ごろの湖南大学について、阪本楠彦は『湘桂公路 一九四五年』のなかで次のように記している。⁶⁴

——大学に机や椅子はほとんどなかった。燃されてしまっていたらしく、我々は燃料として、教室と教室を隔てる板壁を破壊して使った。そして図書館にはまだ本があった。というのはつまり、四カ月ぶりで尻を拭ける紙にありつけた、ということでもあった。文化財の破壊には違いないが、「三訓」に反するわけでもない。制止するまでのことでもない、そのときの私は判断し、ただ自分だけは使うまいと心掛けたにとどまる。戦友から「使え」と勧められても、「今まで紙が無うて間に合ったのに、何を今更」と断ってである。

「魚米之郷」、「両湖熟れば、天下足る」といわれるほど豊かであった湖南省は、度重なる戦乱で見ると影もなく破壊されつくしてしまったのである。以上のような湖南省長沙のその後の戦況をみれば、一九三八年二月に臨大が雲南移転を敢行したということは、時宜をえた適切な判断であったといえるだろう。

注

- (1) この旅行団について、「歩行団」もしくは「徒歩旅行団」の名称をもちいているのは手元の資料では『南開大学校史』のみで、その他は『北京大学校史』『清華大学校史稿』等、すべて「湘黔滇旅行団」と記している。
- (2) 蔡孝敏「旧來行処好追尋——湘黔滇歩行雜憶」、『清華校友通訊』新六二期（一九七八年一月）所収、一七頁。
- (3) 全行程一、六七一キロのうち徒歩の割合は、二月四日に決定された計画では六八八キロ（約四一％）、聞一多の二月一六日付手紙に書かれたもので七九一キロ（約四七％）で、いずれも半分以下である。本稿第二〇章四〇頁参照。
- (4) 吳徵鎰「長征日記」、前掲書、八頁（以下、本稿において吳徵鎰の記録をもちいるばあいは、すべてこの「長征日記」によるものであり、いちいち出処は明記しない）。同様の記述は、聞一多の二月一六日付父宛手紙、李鐘湘「国立西南聯合大学始末記（上）」、前掲雜誌、七三頁にも見られる。なお、一九四九年以降に中国で刊行されたもので、「張治中が黃師岳を團長として派遣した」との記述が見られるのは、手元の資料のなかでは聞一多の手紙のみである。
- 蔡孝敏、前掲文、一七頁、馮鐘豫「四十年来」前掲雜誌、六四頁には、いずれも政府が黃師岳を派遣と記す。
- 『雲南師範大学大事記』（一五頁）には、黃師岳はもと東北軍の師長（師團長）であったという。また蔡孝敏は、黃師岳について「五〇歳の高齡であったが、堂々たる体軀で、和やかで親しみやすく、日夜団員と苦樂をともし、学生たちはあたくも肉親のごとくいたれりつくせりに面倒をみてもらった」とも記している。
- (5) 雲鎮「津湘瀆求学記」、『清華校友通訊』新六七期（一九七九年四月）所収、七六頁。
- (6) 馮鐘豫、前掲文、六四頁。
- (7) 聞一多、一月三〇日付妻宛手紙。
- (8) 同行の教師一一名のなかに、毛鴻等三名の教官の名は含まれていない。『国立西南聯合大学校史資料』所収の教職員名簿に毛鴻は軍事管理組主任教官と記されている。また、蔡孝敏の前掲文には、旅行団はいくつかの大隊に分かれ、各大隊は若干の分隊に分かれたが、もう記憶は定かではない。分隊長には隊員（学生）がなり、大隊長には軍事訓練の教官があたった。そのなかでも毛鴻は真面目で責任感の強い教官であったが、不幸なことに、それから一年あまり後、公務で重慶に赴いたときに自動車事故で殉職した、と記す。

(9) 『南開大学校史』二四二頁。本書には、同行した教師は一人として、その名前があげられているが、『北京大学校史』(三二八、三二九頁)他に記された教師一人(本稿第三章四、五頁参照)と南開大学の侯洛荀の名が記されており、合計すると二人になる。

(10) 吳徵鑑、前掲書、一七頁。

(11) 湘黔滇旅行団に同行した一名の教師の専門分野は、『国立西南聯合大学校史資料』所収の教職員名簿による。但し、同書にも記すとおりこの名簿は不完全なもので、王鍾山の名を見出すことはできなかった。蔡孝敏の「湘黔滇旅行団雑憶」(『清華校友通訊』新七八期、一九八二年一月所収、三四、三五頁)によれば、郭海峯と王鍾山はそれぞれ生物系と地質系の助教、李嘉言は中文系教員であったという。また、若手教員の卒業年度は『清華校友通訊』卒業生名簿による。

『国立西南聯合大学校史資料』所収の教職員名簿に記された王鍾山を除く一〇名の肩書は次のとおりである。なお、各系(学科)の教員は系主任、教授、副教授、専任講師、半時専任講師、講師、教員、助教(助手)からなる。

黄子堅 教育学系教授、国立昆明師範学院院长(一九三八年八月一六日任)

李繼侗 理学院生物学系主任(一九三七年十月四日任)、教授、教務処教務長代理(一九四六年三月十三日)

曾昭掄 理学院化学系教授

袁復礼 理学院地質地理氣象学系教授

聞一多 文学院中国文学系教授

許維適 文学院中国文学系一九三九年教員、四三年から副教授

李嘉言 文学院中国文学系助教

毛応闘 清華大学農業研究所昆虫学組教員

郭海峯 清華大学農業研究所昆虫学組助教

吳徵鑑 理学院生物学系教員(一九四三年任)

(12) 蔡孝敏「湘黔滇旅行団雑憶」、前掲雑誌、三四頁、「我和清華的緣分」、『清華校友通訊』新一〇七期(一九八九年四月)所収、一〇〇頁。

- (13) 孟昭彝「印象深的の老師們(一) 袁復礼先生」、『清華校友通訊』新一九期(一九六七年三月)所収、一〇頁。
- (14) 但し、二月一五日付手紙には、昆明に到着するまで四〇日あまりもかかり、その間、家からの手紙を受けとることができないとあり、このときには旅行団に参加することを決めていたものと推測される(本稿第一七章二八、二九頁参照)。
- (15) 孟昭彝、前掲文、九、一〇頁。
- (16) 浦薛鳳、前掲書、四七頁。
- (17) 聞一多、四月三〇日付妻宛手紙。
- (18) 『南開大学校史』二四二頁。
- (19) 張起鈞「從長沙到昆明——草創期間的西南聯大」、『清華校友通訊』新七五期(一九八一年四月)所収、七四頁。
- (20) 秦瓚については、一八九七年生まれ、字は績略、河南省固始の人。アメリカに留学し、コロンビア大学経済学修士、一九三一年以来、北京大学法学院経済学系教授(橋川時雄編『中国文化界人物総鑑』、中華法令編印館、一九四〇年)ということしか分からない。
- (21) 雷澍滋教官については、本稿第一九章三四頁参照。
- (22) 本稿第二五章一四、一五頁参照。
- (23) 浦薛鳳、前掲書、七一頁。
- (24) 鄭天挺、前掲文、三二八頁。
- (25) この他に、朱自清ら十数人の教師も第三のコースで雲南に赴いた。「朱自清先生年譜」(季鎮淮編著『聞朱年譜』、清華大学出版社、一九八六年所収、一四七、一四八頁)には、二月一七日桂林着、二四日柳州泊、二五日南寧着、三月一四日昆明到着と記す。但し、『雲南師範大学校史稿』(一一頁)によれば、このとき一行の大部分は三月六日昆明に到着している。同行していた馮友蘭が、広西省西南境の凭祥で骨折して入院、朱自清と陳岱孫がその世話をしたため、昆明到着は三月一四日になったのだという。
- (26) 浦薛鳳、前掲書、七七、七八〇頁。
- (27) 嶺南大学は、広州にあったアメリカのプロテスタント宣教会が経営する大学。前身は一八八八年(光緒一四年)に設立さ

れた格致書院で、一九〇四年嶺南大学と改名し、文・理・農・商・工・医等の学部が設置された。抗日戦争中は香港および広東省の曲江、梅県等に移転。戦後、広州にもどったが、一九五一年人民政府が吸収し、一九五二年には解体され、他校に吸収された。

- (28) 本稿第二章一四、一五頁参照。
- (29) 本稿第二章一六頁参照。
- (30) 郁振鏞「三〇年後憶長沙——長沙臨時大学一段古」、『清華校友通訊』新二六・二七期合刊（一九六九年一月）所収、一二頁。
- (31) 何兆男「男生的禁地」、『清華校友通訊』新二〇三期（一九八八年四月）所収、一二〇、一二二頁。
- (32) 何兆男は、清華大学の学生傳幼俠も京劇を演じたと記すが、かれは海路をとらず旅行団に参加している。
- (33) 雲鎮「津湘瀆求學記」、『清華校友通訊』新六七期（一九七九年四月）所収、七六、七七頁。
- (34) この「義勇軍進行曲」は、そのご中華人民共和国の国歌となったため、雲鎮はこの歌の最初の部分をとって「『起来！』の歌」とのみ記している。
- (35) 嚴国泰も広州の嶺南大学に滞在したのは一カ月あまりと記している（『我的生平』、『清華校友通訊』新二五期、一九九一年四月所収、三二頁）。嚴国泰は一九一九年生まれ、清華大学航空工程系一九四一年卒業、アメリカ在住。
- (36) 曹美英「播遷中的聯大女同学『想到就写』・『男生的禁地』補遺」、『清華校友通訊』新二〇八期（一九八九年七月）所収、九四、九五頁。
- (37) 萬宝康「我怎樣成為聯大第一屆畢業生」、『清華校友通訊』新二〇三期（一九八八年四月）所収、一一三、一一四頁。
- (38) 羅宏孝「畢業五十年」、『清華校友通訊』新二五期（一九九一年四月）所収、二四、二五頁。
- (39) 『南開大学校史』二四二頁。
- (40) 張起鈞、前掲文、前掲雜誌、七五、七六頁。
- (41) かれらが河口に滞在していた二カ月のあいだ、質素な食事代以外に金銭を支払う必要がまるでなかったというのは、この河口には小学校があり、小学校といっても、その周囲数百里内の最高学府であり、校長の唐一之先生は当地でもっとも学問のある精神面での指導者で、かれらが河口に招待処を設置することを聞くと、すぐにかれらを訪ねて小学校で宿泊させてく

れることになった。雷教官はかれらが国を愛し、向上心をもっているうえ、生徒たちも純朴で可愛らしかったので、国旗掲揚式のやり方（かれらはそれまで知らなかった）を教えたり、生徒たちのために講演をした。かれらはいそいそ感謝して、張起鈞らの部屋代他の雑費を受けようとしなかったばかりか、炊事洗濯のための人まで遣わしてくれた。そんなわけで、一二〇元がほとんど残ったのであった（張起鈞、前掲文による）。

(42) 本稿第一八章三一頁参照。

(43) 聞一多、二月一六日付父宛手紙。

(44) 浦薛鳳、前掲書、七八〜八〇頁。

(45) 『湖南近百年大事紀述』七五〇〜七五二頁。

(46) 那志良『故宮四十年』（台湾商務印書館、一九八〇年）八六〜八八頁。

(47) 那志良、前掲書、八七頁。

(48) 本稿第一章三〇、三一頁参照。

(49) このときの長沙空襲の惨状については、王西彦のルポルタージュ「十月十九日長沙」（『中国抗日戦争時期大後方文学書系』第八卷・報告文学、重慶出版社、一九八九年、一二二〜一二七頁）に詳しい。

(50) 防衛庁防衛研究所戦史部著『戦史叢書 陸海軍年表』（朝雲新聞社、一九八〇年）、『抗日戦争紀事』。

(51) 『中国抗戦画史』、二二三頁。

(52) 『湖南近百年大事紀述』、七六五、七六六頁。

(53) 本文中に引用したものの他には、以下のような資料がある。

『周恩来年譜』四二五頁。

一月一二日深夜、長沙の地方軍警責任者が日本軍はすでに長沙にまで到達したとのデマを真に受け、国民党最高当局のさだめた「焦土抗戦」の方針にもとづき、長沙に火を放つよう命令を下した（「焦土抗戦」とは、国土を焦土にしても徹底的に抗戦すること）。

『抗日戦争紀事』一〇四頁。

一月二三日 長沙の大火。一二日午前九時ごろ、蒋介石は湖南省政府主席張治中に、長沙城の全域に火を放ち、「焦土抗戦」を實行するようにとの密令を下した。この日の払暁（つまり一日の午前）二時半、城内全域の数千カ所から同時に火がでて、長沙はたちまち火の海となり、三日三晩火は燃えつづけ、城内の十分の九が焼けおちた。

馬齊琳・張同新・李家泉等編『中国国民党歴史事件・人物・資料輯録』（解放軍出版社、一九八八年）一三〇頁。

一月一二日の午前九時ごろ、蒋介石は湖南省政府主席張治中に、「長沙如し失陥せば、務めて全城を將て焚毀せしむべし」との至急電報を打った。そこで、張治中は長沙警備司令鄧悌等と計画を練り、命令が下るやただちに執行できるように準備していた。ところが、長沙警備司令部は敵を恐れて、日本軍はすでに長沙近くに迫っていると誤認し、一三日午前一時ごろから城内各所に火を放った。鄧悌および省警察局長文重孚、長沙警備二团团長徐寛等はみずから車に乗って放火の監督をおこなった。長沙城内はたちまち火の海となり、三日三晩火は燃えつづけ、長沙は一面の焦土と化した。

先にあげた二本には、焼失した家屋五万余棟、焼死した市民二万余人（但し、『周恩来年譜』には、死傷者二万余人）とあり、この数は本文中に引用した『湖南近百年大事紀述』の記述とほぼ同じである。しかし、『中国国民党歴史事件・人物・資料輯録』のみ、この大火の死傷者数が二千人とあり、あるいは誤植なのかもしれない。

なお、岳陽一帯の日本軍はこのとき長沙には侵攻しなかった。

(54) 『抗日戦争紀事』一〇五、一〇七頁。

(55) 本稿第一四章五〇、五一頁参照。

なお、陳誠は一九四五年国民党中央執行委員、常務委員、一九四六年六月参謀長兼海軍總司令、一九四七年九月東北行轅主任、一九四八年五月辞職、一月台湾省政府主席兼台湾警備總司令、一九四九年七月東南軍政長官。そのご台湾国民党行政院院長、行政院設計委员会主任委員、副總統、光復大陸設計委员会主任委員、国民党副總裁等を歴任、一九六五年三月五日台湾で病死。

(56) 宋廷琛「記陳誠張治中在国立長沙臨時大学的演講」、前掲雑誌、六七頁。

(57) 西南聯大を卒業したある学者（中国在住）は、本文中に引用した対聯を見ると、こんな対聯もあったと、すらすらと以下

のように書かれた。

治何云焉三大政策一把火 治とは何をか云わん 三大の政策 一把の火

中心忍矣二顆頭顱万古悲 中心 忍びん 二顆の頭顱 万古悲し

ここにも、もちろん(張) 治中の名がはめこまれてあるが、冤罪で処刑されたのは三人であったことから、あるいは記憶違いで、二と三を入れかえた方が正しいのかも知れない。

(58) 『湖南近百年大事紀述』七五〇～七五二頁。

(59) 楊克林・曹紅編著『中国抗日戦争図誌』(天地圖書有限公司・新大陸出版社有限公司、一九九二年) 中編六六四、六六五頁、下編九三五～九四三頁。

中国側資料としては、本文中に引用したものの他に、たとえば以下のような資料がある。なお、便宜上、刊行年の古い順に並べ、既出の資料については、出版社と刊行年のみ記す。

『中国抗戦画史』(聯合画報社、一九四七年版影印、中国書店、一九八八年) 二四八、二八四～二八七、三二七～三二九、三五二、三五三頁。

第一次長沙会戦(一九三九年九月中旬～一〇月一九日)

日本軍の死傷者は約二万人。

第二次長沙会戦

一九四一年九月六日日本軍は攻撃開始、一〇月一日夜総退却を開始。日本軍に死傷者三万余人、歩兵銃千三百余、機関銃三八、山野砲六、歩兵砲九、戦馬八百余匹、装甲車八、捕虜百余人の損害を与え、中国軍は大勝利をおさめた。

第三次長沙会戦

一九四一年一月二四日から。一九四二年一月一日、日本軍は長沙猛攻を開始、しかし長沙を落とすことができず、一月四日夜から撤退、中国軍側は、一月一五日会戦前の態勢を回復。この会戦で五六、九四四人の敵を倒し、捕虜一三九人、馬二七〇匹、歩兵銃・騎兵銃一、一三八、機関銃一一五、砲一一、ピストル二〇余、擲弾筒二〇、無線機九、他のおびただしい損害を日本軍に与えた。

長衡会戦

一九四四年五月下旬から。長沙陥落は六月一九日、八月八日衡陽が陥落。

『湖南近百年大事紀述』（湖南人民出版社、一九七九年）七七七～七七九、七九〇～七九三、八〇三、八〇四頁。

第一次湘北会戦（一九三九年九月一四日～一〇月八日）

第二次湘北会戦（一九四一年九月七日～一〇月八日）

九月二七日長沙陥落、日本軍は五日間長沙で食料・財物を略奪した後、一〇月一日長沙から撤退。

第三次湘北会戦（一九四一年一月二四日～一九四二年一月一五日）

日本軍の退却後、薛岳（中国軍第九戦区司令長官）集団は、五万余人の敵を倒したとのデタラメの報告をして「第三次湘北大勝利」を捏造した。

一九四四年五月二五日湘北で全面戦争が起こり、日本軍は六月一六日株洲、六月二七日湘潭、六月一八日長沙を占領した。

『中国国民党歴史事件・人物・資料輯録』（解放軍出版社、一九八八年）一三七、一四四～一四六、一五五、一五六頁。

第一次長沙会戦（一九三九年九月一四日～一〇月一〇日）

第二次長沙会戦（一九四一年九月七日～一〇月八日）

日本軍は九月二六日長沙市近郊を猛攻、しかし後方との交通線を断たれ補給困難となり、三〇日撤退。

第三次長沙会戦（一九四一年一月二四日～一九四二年一月一五日）

一月一日、日本軍は長沙猛攻を開始、守備隊は頑強に抵抗し激戦が数日間つづくが、国民政府軍が日本軍を包囲、反撃に転じ、日本軍は退路を断たれ補給もつづかず、多数の死傷者を出して一月四日夜撤退する。

長衡会戦

一九四四年五月二六日開始、八月七日衡陽が陥落して終結。長沙陥落は六月一九日。

『抗日戦争紀事』（解放軍出版社、一九九〇年）一八四、二九〇、三〇六、四一九、四二七頁。

第一次長沙戦役（一九三九年九月一四日～一〇月七日）

日本軍の死傷者は一万三千人、第九戦区死傷者は二五、八三三人。日本側の公表によれば、中国軍の遺棄死体四万四千、捕虜約四千人。日本軍の戦死約八五〇人、負傷者約二千七百人。

第二次長沙戦役（一九四一年九月六日～一〇月九日）

日本軍は長沙をいったん占領するが、撤退。中国軍は日本軍二万余人を殲滅。

第三次長沙戦役（一九四一年二月一九日～一九四二年一月一六日）

日本軍の死傷者は五万人以上。

湖南戦役は一九四四年五月二七日開始。六月二〇日岳麓山が落ち、長沙は陥落する。

一九四四年八月八日衡陽陥落。四五日間にわたる衡陽会戦で、日本軍の死傷者は六万余人。

『中華民国史辞典』（上海人民出版社、一九九一年）四四〇、四四一、四六九、四七〇頁。

第一次長沙会戦（一九三九年九月一四日～一〇月一五日）

日本軍の死傷者は約三万余人、中国軍の死傷者は約四万人。

第二次長沙会戦（一九四一年九月一八日～一〇月六日）

九月二八日、日本軍は長沙をいったん占領するが、一〇月一日長沙から撤退。

第三次長沙会戦（一九四一年二月一七日～一九四二年一月一五日）

湘桂戦役

一九四四年五月、日本軍は河南を占領すると、直ちに湘桂戦役を発動。五月二七日、日本軍は一三〇個師団三六万の兵力をもって湖南に侵入。長沙陥落は六月一九日、八月八日衡陽が陥落。

なお、台湾の容鑑光『長沙三次会戦』（国史館、一九九〇年）四頁には、以下のように記す。

第一次長沙会戦（一九三九年九月一四日～一〇月一四日）

第二次長沙会戦（一九四一年九月七日～一〇月九日）

第三次長沙会戦（一九四一年二月一九日～一九四二年一月一五日）

長衡会戦（一九四四年五月二六日～八月八日）

- (60) 『戦史叢書 陸海軍年表』(一九八〇年) 四〇、八〇、八二、九七、九九、二三三、三三七、二四八頁。
- (61) 『戦史叢書 香港・長沙作戦』(一九七二年) 五三三、五三四、六六五、六六六頁。
- (62) 佐々木春隆『長沙作戦』(図書出版社、一九八八年) 一五三、一五八、二〇三、まえがき二頁。
- (63) 読売新聞大阪社会部『中国慰霊』(角川書店〈文庫〉、一九八五年) 八、一九、四七、五三、七四、七七、一九四、一九五頁。森金千秋『湘桂作戦』(図書出版社、一九八七年) 三三、二四三、二四八頁。
- (64) 阪本楠彦『湘桂公路 一九四五年』(筑摩書房、一九八六年) 一七二頁。

〔本稿は一九九一年度同志社大学学術奨励研究費による研究成果の一部である〕